

文 清

渡 邊 一

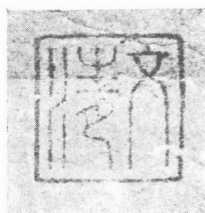
文清畫は久しく如拙畫の下に混同されてゐた。この事情を明かに示してゐる最初の文獻は狩野永納の本朝畫印史料一であつて、同書が如拙印の唯一の例として掲げたものは即ち文清のそれに外ならなかつた。爾來この誤は永く繼續し來つたと共に、その間に自ら幾種かの偽印を生じて茲にその蹤跡をして愈辿り難いものたらしめたが、かくの如き事情に對して疑の目を向けたのは概ね古畫備考以降である。史料二この書は如拙畫中の文清印あるものとして原家の現藏に係る維摩像と二點の山水畫とを挙げ、その印影をも示したが、併し未だ之等に對して何等の説をも加へるには至らなかつた。もと當時の文清畫中にも特に尤品として注目を惹いてゐたのはこの維摩像で、註一その圖の上には長祿元年小春の年記ある存畊祖默東福一三四、南禪一八六、應仁元、二、廿二(一說一四)寂の長文一贊註二が加へられて居り、これによれば駿河守荒川詮氏が老を越中利波(礪波)郡に養つて遂に此地に歿したのち、その子善濟首座が遺

言によつてその第を捐て、佛寺とし、室中にこの圖を掲げて以て詮氏の眞容に擬したものである。この祖默の贊がこの圖の成つてから間もなく記されたとすれば、既に如拙の主要な活躍時代から四十年前後を隔ててゐる製作となるから彼の筆でない事は容易に想像されるが、圖中の印記「文清」を如何に解すべきかは到底明かにし得なかつたのである。註三併しこの問題は、大正十年夏福井利吉郎教授が大徳寺の庫藏中から全く同一の文清印ある二點の禪僧像を發見し、翌年またポストン美術館藏品中から同じい一幅の山水畫を紹介されるに及んで、遽かに豊富な資料を加へることとなり、その研究として福井教授の論説研究文獻一が公にされた。

文清の印記ある四點の畫蹟中年記を徴し得るものは二つ、一は享徳元年九月養叟宗頤が七十七歳に當つて自ら法眷揚上司岐庵宗揚の爲に書し與へた贊註四のある肖像であり、一は今述べた長祿元年存畊の贊あ

る維摩圖である。此間は約六年を隔てるに過ぎず、また同じ養叟の賛ある楊岐像も年記は缺くが固より甚しくは年代の離れたものではない。而して四點中三點まで頂相系のものであるが、中に於て楊岐方會は云ふまでもなく南嶽下十一世所謂楊岐派の祖で、同じ像は明兆の三十祖、四十祖の何れにも見られ、像容略相通する。

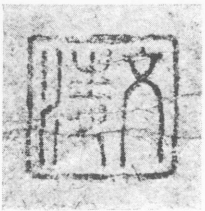
楊岐像印



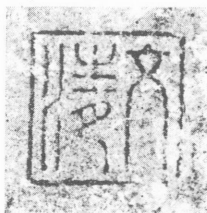
養叟像印



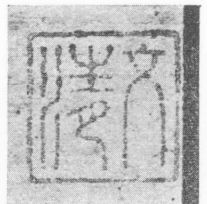
維摩圖印



山水圖印



虎溪三笑圖印



以上原寸

山水圖印はポスト

ン美術館寫眞

而も特に文清畫は面貌の描出、衣文の線法等に形式的整備を示し、賦彩また之に適つてかなり忠實に大陸の藍本に依つた跡が認められる。養叟像は一轉して寫貌極めて綿密、八旬に垂んとするこの老禪の風丰を逐うて一毫一皺をも失はざらんを期するもの、如く、衣文亦謹恪の間に抑揚を得て、正に對看中の像なることを思はせる。而も三者中最も卓出するものは維摩で、之また恐らく海彼の本に據つたものであうが、跌宕の筆によく一默雷の如き居士の丰神に迫つて

殆んど餘蘊なきに近く、且つその風趣は或は周文に似るとし或は朝鮮の臭味を含むとも考へられて、この間の消息は本朝畫印が之を如拙に混じたのも故あるかにも感せしめるものである。併しこの三圖に互して更にも文清畫に光輝を添へるのはポストンの山水であつて、之をかゝる如拙の瓢鮎に比するときはその間の推移の著しさに駭かるべく、圖様は固より、筆線の整ひ、墨潤の抑揚に正に所謂周文風の様式に屬することを示し、なほ細部には曾我の風または藝阿祥啓風とも呼應するものが認められる。而も特に構想の詩味に富んで且つ甚だ簡淨なる點、筆致の努めて謹厚にしてなほ清勁なる點は當時の諸畫蹟も容易に至り難い風格を示すものである。

さて之等を通ずる福井教授の論說の要旨は斷るまでもなく、茲に文清なる一人の畫家を新しく認めんとされるに在る。是に關する事情の大體を云へば、之等四點の文清畫は以上に述べた如くそれぞれにかなり趣を異にするものではあるが、特に三點の肖像に就いて見るに、相互の年代は極めて近いと同時に、教授は特にその用筆に一味相通する趣致があつて正に一人の畫家に屬せしめ得ると說かれてゐる。のみならずこの三畫に共通の「文清」印は、他に例へば鑑藏印記等の類として認むべき積極的な理由がないとすれば自ら畫家自身の使用とせざるを得ないことゝなるであらう。ポストンの山水畫は前三者と題材を異にし、従つてまた手法の比較に資し得る點が尠いが、その推定される製作年代は甚だ彼等に近いと同時に、この文清印が前三者によつて既に畫家印と認め得るならば、當然之も亦そ

れに従はねばならぬ筈である。

以上の事情は蓋し茲に一人の畫家を認めしめるには固より十分であらう。唯この四點を通ずる畫家の技量は或はや、不揃の觀がなくもない。特に養叟像は、他の二像が大陸の藍本に依るに對して、親しく對看の間に得たものであるに拘らず、三者を通ずる最優作が維摩なるが如き點にその感を深くする。斯の如き事情は恐らく彼の時代が未だ我が水墨畫壇の最盛期に入つてゐなかつた爲の結果でもあらうか。ボストン山水が亦過渡的な様式を含むことも既に述べたが、併し特にこの維摩と山水とによつて示される文清の位置は少くも當時の主流に屬する。福井教授はこの山水は畫格に於て、また史的意義に於て敢て如拙の瓢鮎に互して憚らざるものであらうと評された。若しまた文清の更歴を之等の作品によつて想像するならば、その肖像の二作が一は恐らく養叟自身の爲、一はその一門下の爲にされてゐて、而も共に養叟の贊あることに省るとき或はその法眷の一人でもあらうと思はせる。且つ山水圖も傳へて小堀遠州の遺愛と云はれ、遠州と大徳寺との交渉を思へば之また同寺の關係から出たと考へられて、彼が大徳寺系の畫僧だつたとする推定を助ける。因に云へば養叟は諱宗願、早歲東福の九峰韻奏に従ひ、のち華叟宗曇に久參し、大徳寺中大同菴に居つて文安二年出で、同寺第二十六世位に陞り、長祿二年齡八十三にして圓寂したと云ひ、一休宗純の法兄に當る。

斷るまでもなく所謂「文清」の印ある畫蹟はこの四點以外かなり

屢聞見する。之等のうちに山水畫、特に著しく朝鮮風を帶びたものの多い事が注意されるが、なほ時としては花鳥の穠彩畫にも及ぶ。

併し之等と先の四點とは固より畫風上の連絡も求め難く、印章にも明かな差異があつて、之等こそ如拙に擬せんが爲に加へられたものかと考へられる。但し寓見したもの、うち、齋藤利助氏所藏の一點の虎溪三笑圖はその印章が通途の擬印と異つて先の四點のそれと同一と認められる。その圖様は侯爵淺野家所藏の傳周文三笑圖の人物に酷似し、恐らく兩者が共通の原本に出でたことを推定すべきものと思はれ、從つて畫法も亦遽かには先の四點と同一視し難いが、甚だ注意すべき資料として茲に掲げた。特に研究の日淺き畫家として、將來の作品の發見は當然なほ多く豫期せられる所であらう。

なほこの所謂文清畫中に朝鮮風山水の多い事は、文清——と云ふよりは寧ろ如拙であるが——時代に於ける朝鮮畫との交渉を徴し得る興味ある事實であり、この間に特に朝鮮總督府博物館にこの種の一例が存する^{圖版索引六}ことが注意を惹かれてゐる。これは何かの意味で文清と朝鮮とを繋ぐものとして、現在でも往々彼の作品が朝鮮關係の圖錄中に收められてゐるのを見るが、併し少くも現在ではかくの如き關係を旁證する他の事情は知り得ない。

以上を通じて文清に關してはその明確な作品數點が得られ、之によつてかなり多方面の面目を窺ひ得る點に於て、彼は寧ろ如拙の場合以上に資料を持つとも云へる。併し繰返すまでもなく彼は最近ま

で全く知られてゐなかつた畫家であると同時に、今日に於ても未だその存在を裏書すべき文獻は見出されてゐない人である。いまや彼は以上の作品によつて概ね動かし難い存在とはなつたが、なほこの點で彼に多少の問題の残つてゐることは否定し得ない。即ち文清は正しく一度それを蔽うてゐた如拙の下から離れて、いまや一個の印章によつて名を立てられたが、この事情は他日彼の存在に如何なる變化が起るかも知れない事を豫想してゐるもので、特にその地位の甚だ高く買はるべき事を考へるとき、たとへばそれが將來再び他の某畫家の名と結びつけられんとするが如きは即ち起り得べき場合の一つであらうかと想像される。文清の傳歴は、いま述べた如く養叟と深い關係があると考へられるのであるが、養叟は偶々我が水墨畫壇の一棟梁宗湛をその門下から輩出してゐる。また當時の大徳寺、特に一休との交渉のあつた畫派に曾我のあつた事も云ふまでもない。同じい周文派の一人として文清は恐らく彼等と没交渉ではなかつたであらう。作品の様式上の關係も之を暗示するに近い。曾て夙く國華誌上に文清畫を紹介して或は宗湛の別名かとする想像の掲げられた事があつたが^{第一四四號}維摩像解説かくの如き想像は今日に至つても未だ全くは無稽視し去ることはできないかも知れない。畫家文清が將來文獻によつて明かにされた場合の結果に對しては甚だ興味が抱かれる。

終に臨んで貴重な藏品の調査を許された諸家、就中その爲に厚く御高配を煩はした齋藤利助氏、竝に山水圖印記の原寸寫眞を特に撮

影して寄せられたボストン美術館に對して深甚なる謝意を表する。

註一 この圖の近年の傳來は河鍋曉齋から子傳三浦梧樓氏を経て現在の原家に移つたものである。國華一四四號參照。

註二 維摩像贊

彼上人著居士服住毗耶城乘菩薩願爲利達情遊遊戲神通則「天廻地轉振無礙辯才則風激雷轟以至屈阿難迦葉令彼摧鋒折」又「迺日連鷺子令彼飲氣吞聲唯有文殊大士雖難酬對而心膽共」傾十笏之間容三萬床座巨海滂水一默之中示不二法門日午三更「本無病而病始無生而爲生如是不思議解脫力黃金鑄出生鐵打成」夫是之謂過去金粟如來隨佛助化居士淨名

荒川駿河太守詮氏法諱道玖字玉峯威蒙草木仁及昆蟲海內「勇士也 大人相公特賜恩私營冤委於越之中州利波郡直海東」縣安奉蒲輪養老身今既四十餘年矣譬如司馬文政公久在洛「中民以無不樂矣 玉峯常囑其英子善濟首座曰吾捐館之後以私」第爲僧舍以田園爲僧供朝誦夕香圓滿考此菩提之果可到慈氏三「會之時云々善濟首座乃受遺囑預於生前改華館爲精舍編寺淨名」室中安置維摩詰之像擬比 玉峯之眞容也蓋表眞俗不二之義乎耶」一日持此像來請予著拙語於其上不獲拒綴俚語以爲眞贊 峯長祿元年丁丑小春 日 前南禪存畔祖默七十二歲自筆拜贊（印記二）

註三 後述する如く國華（一四四號）の解説に宗湛説があり、又小川鶴城氏の「周文畫の鑑識に就いて」（國華一七七、一七八號）に之を周文畫とする説がある。

註四 養叟像贊

隱半身兮顯愚夫顯全體兮揚禪老「彼此如許多機關沒可把半合」半開 可知禮也暖揚公身寫老拙朽質請贊」書以證它云

享德改元壬申菊月 日「養叟老拙宗願書（印記二）」

註五 楊岐像贊

演祖曰師翁初住楊岐老屋敗椽僅蔽風雨「適臨冬暮雪霰滿床居不遑處袖手投」誠願充修造師翁却之曰我佛有言時當「減却高岸深谷遷變不當安得圓滿如意」身求稱足如等出家學道做手脚未穩已是「四五十載誰有閑工夫支豐屋耶意不從翌日」上堂曰楊岐住屋壁疎滿床盡撒雪珍珠縮」却項暗嗟嘆憶故人樹下居宗願拜書（印記二）

文
清
筆
維
摩
像

神
奈
川
原
富
太
郎
氏
藏

文
清
筆
楊
岐
和
尙
像

京
都
大
德
寺
藏

文
清
筆
虎
溪
三
笑
圖

東
京
齋
藤
利
助
氏
藏

關係年表

西紀	關係事項	本譜
應永一五年(一四〇八)	→如拙畫瓢鮎圖(?)	
享德二年(一四五三)		養叟宗願像自贊
長祿元年(一四五七)		存畊祖默維摩圖贊
同二年(一四五八)	六、廿二養叟宗願寂	
應仁元年(一四六七)	二、廿二說存畊祖默寂	

史料

- 1 [本朝畫印] 如拙の項
(印記一、後出)
僧如拙九州ノ人也相國寺ニ有テ能畫ナリ山水花鳥人物ヲ畫ク墨彩トモニ神妙ナリ
- 2 [増訂古畫備考] 如拙の項中より拔萃
○畫史如拙印有ニ文清二字方印、有ニ其印一者、余見ニ維摩半身像、有ニ祖默和尚贊長祿年號、畫似ニ周文一
(補) 山水双幅
- 傳如雪 (印記一、後出)
(補) 又山水ヲ見ル、紙本墨畫、周文ニ似テ極佳ナリ、馬遠人物、毛益八々鳥、舜舉花籠、趙千里圓窓宮殿蓮池、後京極色紙、足利義尚色紙トモ七幅、銘々引出簞笥入
- 3 [日本國寶及特別保護建造物目録] 後の指定のものも便宜附記す

東洋美術總目錄 文清

- 繪 養叟和尚像一幅 文清筆 享德元年九月養叟ノ自贊アリ 紙本淡彩〔甲四、大一一、三〕
- 繪 楊岐和尚像一幅 文清筆 養叟ノ贊アリ 紙本淡彩〔甲四、大一一、三〕
- 繪 維摩居士像一幅 文清筆 長祿元年祖默贊 紙本墨畫〔昭一一、五、六〕
- 4 [重要美術品等認定物件目録] 第壹輯 (昭一〇、一二、一三認定)
- 紙本墨畫維摩像 文清筆 祖默ノ贊アリ 一幅 神奈川縣橫濱市中區本牧町 原富太郎
- (但し昭和一一、五、六國寶に指定せらる)

(印譜)



本朝畫印



古畫備考(山水圖双幅)

(共に如拙の項に收む)

研究文獻

作品の解説は圖版索引を参照の事

- 1 Rikichiro Fukui; A Landscape by Bunsei in the Boston Museum. Burlington Magazine, CCXXVI, Vol. XLI, Nov. 1922